

桓武朝の諸問題

過去十年に亘って、古代史学界にいくつかの貴重な貢献をなして来られた古代史学会が発足十周年を記念して『古代学』第十卷二、三、四号に特集されたのが本書である。最近ようやくその社会的動向の追究が要求されている。桓武朝を特集されたことは、学界のためにも誠に有意義なことといわなければならぬ。

先ず本書の構成を示せば左の様である。

序 佐藤虎雄

平安初期における文章の経国的性格 池田源太

勅旨省と勅旨所 角田文衛

桓武朝における用水統制とその背景 亀田隆之

桓武朝における地方行政の監察

——いわゆる『律令制再建論』にふれ

て—— 阿部 猛

桓武朝後半期の一・二の問題

——延暦十四年十月八日格を中心に——

桓武天皇の境涯

野村忠夫  
佐伯有清

桓武朝の皇親をめぐる

佐藤虎雄

桓武朝の行政改革について

山田英雄

桓武朝にはじまる地方人の

喜田新六

京都貴附について

喜田新六

桓武朝における郡司層の動向

—— 諸方規・諸方策より見たる ——

—— 諸方規・諸方策より見たる ——

新野直吉

桓武朝蝦夷征討の経済的・軍事的基盤

大塚徳郎

について

勝野隆信

桓武朝における宗教政策

川勝政太郎

平安京の鴻臚館について

川勝政太郎

以上を一瞥して明らかな様に、桓武朝とい

う一転換期が地方から中央の動向に至るまで

多方面から、それぞれの方法、視角から考察

されているわけである。限られた紙数の中

で、この十三編の論文を逐一紹介することは

できないが、とにかくバラエティに富んでお

り、種々の面で新見解が出されている。例え

ば、角田文衛氏が従来殆ど問題とされていな

かった勅旨省の検討から、それが本来仲麻呂

政権打倒の基礎であること、勅旨省から勅旨

所への移行、更にそれが藏人所の前史を形成

することを論じられたのは、その当否は別としても注目すべき点である。一方、律令制再建論についてもそれぞれの立場で論じておられるが、ただ私にはその間で「律令制再建」の意味のとり方が異っている様に思われ、例えば阿部氏が直木氏に対して反論しておられることにもポイントがあつていない様であり、あまり生産的とはいえない様におもう。しかしこの様な転換期の研究にあつては基礎的な事実の解明が特に重要であり、前記の諸論考が幾多の新見解を呈示し、今後の平安初期研究にとつて重要な問題をも提起している点は高く評価しなければなるまい。

ただ、私が本書を読んで強く感じたのは、右の様に多方面から一時代をとりあげながら、実は依然として桓武朝の社会的動向がイメージとしてでてこない、ということである。それを本書に求めることは無理であろうが、それは私達自身にとつても考えねばならぬ問題を含んでいる様に思える。どの様に多方面から実証的研究をしてもそののみでは社会体制を明確にすることはできないという事を十分考える必要がある。もとよりそれは本書に対する感想というよりも、現在の学

界の動向に対してのことである。

十年といえは、昔、その間の活躍を回顧する時、古代学協会の創立十周年を心よりお祝いとすると共に、今後ともますます古代史学界のために貢献されることを願う。この協会のとって記念すべき『桓武朝の諸問題』の燕雜な紹介の筆をおきたいとおもう。

尚、本書は『古代学』とは別に別刷として出版されていることを附記しておく。

(B5二四三頁、昭和三十七年六月古代学協会刊)

(佐藤宗諒)

## L. Mumford: The City in History

Its Origins, Its Transformations, and Its Prospects. 1961

老学者マンフォードは文明批判家なのであろうか。一見したところで『西洋の没落を書いたドイツのシュベングレーにも通じる感じがある。が彼は哲学や社会思想家ではない。その題名の如く歴史の中に都市生活や文明の発展を考えるとするものである。もともと建

築畑に育った前ベンシルヴァニア大学の都市計画の教授であった人。従って例え文明の変遷を論じてもシュベングレーの書物とは異って、本書中には具体的な都市文明の記述や豊富な挿図写真がぎっしり入れられている。だが彼の書物を読みこなせるエンジニヤーは日本には少いところに本書紹介の価値があると思う。彼の思想はもともとスコットランドの都市計画家であり、生物学者であったパトリックゲッツに影響されたと述べているが、それにしても外国の都市計画家にはこのような市の広い学者のいることに感心させられる。日本の都市計画家といえは県庁の役人か、大学の研究室にあっても無味乾燥な数字の算出による机上の都市計画論が流行している昨今の印象とは大きな差がある。しかし私がかってローマ大学を訪ねた時、その文学部に古代都市計画研究室が設置されていたことや、マンフォードの前著たる『The Culture of City, 1938』が日本の建築家によって早くも紹介されたことを一方には心強く思ったことは事実である。

本書は同じ著者によるこの『都市の文化』の姉妹編をなすもので、どちらかといえは、

前著よりも標題の如く都市の歴史の記述の価値が多いのを特色とする。A5版、六五七ページの大冊版中の結論では過去及び現在、未来の都市文明や都市生活の共通点と差異を見出さんとするのである。あらゆる時代の都市を通じて共通するものはあるが、古代都市において存した為政者の抑圧的条件は、階級差のなくなった現在では存在しないこと、都市は仕事や政治の場であるよりも新しい human personality すなわち、One World Man、としての市民の息吹きを発見する場所だと考えんとするのである。そして戦争は都市の破かい者であることを述べる点に親しまれる。章を分つこと一八。いまその各章の標題のみを示すと次のごとくである。一 聖所・村落・要塞、二 都市の結晶、三 祖先の様式と型、四 古代都市の性格、五 都市国家の出現、六 理想都市をめざす市民、七 ヘレニズムの絶対主義と都市性、八 メガロポリスからネクロポリスへ、九 僧院と社会一〇 中世的都市生活の家計、一一 中世の分裂・現代への曙光、一二 バロック様式の構造、一三 宮廷・練兵場と首都、一四 商